

越前竹人
雁の寺

水上勉

新潮文庫



雁の寺・越前竹人形
がん てら えちぜんたけにんぎよう

定価 280 円

新潮文庫 草 141 C

昭和四十四年三月二十日 発行
昭和五十五年二月十五日 二十五刷

著 者 水 上 勉
みな かみ つとむ

発 行 者 佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発 行 所 株式 新 潮 社
会社 郵便番号 東京都新宿区矢来町一六二

電話 業務部〇三(二六六)五一
編集部〇三(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

雁の寺・越前竹人形

水 上 勉 著



新 潮 社 版

r867

目次

雁の寺……………七

越前竹人形……………二三

解説 磯田光一

雁の寺・越前竹人形

雁が

の

寺

一

鳥獸の画を描いて、京都画壇に名をはせた岸本南嶽が、丸太町東洞院の角にあった黒板塀にかこまれた平べったい屋敷の奥の部屋で死んだのは昭和八年の秋である。

老齡に加うるに持病のぜんそくがひどかったせいもあって、蟻螂のように瘠せた南嶽の晩年は意志だけが生きのこっているように思えた。死なざる時はまるで虫喰いの枯木が倒れたようどした、と居合せた弟子たちが口ぐちにいったほどだから、精力家としても知られ、女あそびも人一倍だった生前を知っているものにとつては、殊更、南嶽の死際がそのように思われたのかも知れない。彼は一昼夜、大いびきをかいて寝ていたが、最後は、やはり咽喉をならし、苦しみもがいて死んだ。南嶽は六十八であった。

岸本南嶽が死んだ日の前日、正確にいうと十月十九日のことであつた。夫人の秀子がちよつと外へ出た留守に、見舞かたがたち寄つたといつて、衣笠山麓にある孤峯庵の住職、北見慈海が訪ねてきた。和尚は首に白絹布の護襟をまき、黒の被布をきて、どこかの回向の帰りとみえ、裾から紫衣の襷をのぞかせていた。

「どうや、どんなあんばいや」

慈海和尚は、玄関に出た顔見知りの女中にそんな言葉をあびせながら、つかつかと入ってきた。と、そのとき、うしろに、まだ十二、三歳としか思えない背のひくい小坊主が立っていた。

この小坊主も和尚の後ろを上ってくる。

岸本家は、孤峯庵の檀家であつた。名譽総代にもなつていたから、和尚がこうして奥の間にさつさと通つても不思議ではないのだが、折から、枕元に坐つていた弟子たちの中で、病人の口もとを水綿でしめらせていた兄弟子の笹井南窓が、ちよつと氣に病んだ。縁起でもないと思つたのである。師匠はいま虫の息で医者からも見放されている。そこへ、菩提寺の和尚の来訪だつた。南窓は、皆にしづい顔をしてみせた。女中が、茶菓をとり廊下へ下つてゆくと、弟子たちの顔色をまるで無視したように、慈海は風をたてて枕元に歩みよつた。臥てゐる南嶽の顔をさしのぞいて、

「どうや、どんなあんばいや」

と和尚はいつた。声がたかかつたので、ひくい天井にまでそれはひびき、襟もとまですっぱり絹蒲団をかぶつて朽木のようにねている南嶽の耳を打つた。とじていた臉を南嶽はうっすらと半びらきにあげると、

「和尚さんか」

と、苦しそうな声をとぎれとぎれにだした。

これは、わきにいた弟子たちを驚かせた。朝から南窓がいくら師匠の名をよんでみても南嶽は押しだまっていた。それなのに、いま乾いた口をわずかにひらいて南嶽はかすれ声でいったのだ。

「来てくれると思つた」

「いやな役目やな」

和尚は、ずんぐりした肩を落して南嶽の顔をさしのぞいてから、横柄な物言いでいった。

「わしは、あんただけは迎えにきとうなかった」

そういうと、広い十畳間に南窓と三人の弟子が坐っているのを、はじめてみるような眼つきで見廻して、不意にケラケラ笑いだした。笑い終ると、先程から縁先に立って、じっと庭の色づいた蔦のからみついている石燈籠に見入っていた小坊主をよんだ。

「おいおい、慈念」

小坊主は、びくつと肩をうごかした。首だけこっちへ廻して部屋をみている。剃っているの
で、頭の鉢の大きなのがへんに目立つ子供である。額が前にとび出ている。ひどい奥眼なので顔
がせまくみえる。

「こっちへおいで」

慈海和尚は手招きした。小坊主は畳のへりをよけて静かに歩きだした。擦るような歩き方であ
る。

「慈念いうてね。昨日、得度式がすんだ。庭もきれいに掃除してくれる。ようなら、いっぺ
ん寺へあそびにきてもらわねばならんの」

立ち寄った理由は、これであったか、侍者を育てることになったあいさつのようなものだった
か。南窓はつるつるに剃った大きな頭の小坊主の横顔をじいっと覗きこんでいた。ずいぶん陰気な感
じのする小僧を入れたものだなと思った。禅寺で小僧が得度式をあげた場合、これを檀家総代に

披露するのがしきたりだったのである。

和尚はやがて枕もとから踵をかえして縁の方に歩きだした。と、このとき、南嶽がまたかすれ声をだしていった。

「和尚さん、さとを頼みますよ。あれは、孤峯さんの娘や」

そういったかと思うと、臉を閉じた。声をだしたのがわるかったとみえて、南嶽ははげしく咳き込みはじめた。南窓がにじりよって、湿綿を口に何どもあてた。

和尚は、その有様をふりかえってみていた。大きく会釈しながら見下ろしていたが、そのとき南嶽の顔はもはや草色であった。

「大事にな」

いい置いて、ほんの四、五分間のやりとりであった。慈海は得度式がすんだばかりの小坊主の頭を一つ撫でると、小股歩きにせかせかと岸本家を退去していった。

翌日まで、南嶽はひと言も口をひらかなかった。大いびきをかいて苦しうに咽喉をならしていたかと思うと、それが急にとまって息をしなかつたりした。息をひきとるときは、口をかすかにあけた。何かいったようなので、弟子たちはのぞきこんで耳をかたむけたが、「さと」ときこえたようであった。

弟子たちは枕元の夫人秀子の方をみた。秀子は袂を顔に押しあてて、むせび泣きはじめていた。きこえないらしかった。

南嶽が死ぬ間際にたのんだ、さとというのは桐原里子のことで、南嶽が上京区の出町の花屋の

二階に囲っていた女である。木屋町の小料理屋につとめていたのを、南嶽がひっこぬいて晩年入りびたりになった相手であるが、この女のことは弟子たちも、慈海和尚も会って知っていた。三十二だが、小柄で、ぼちゃっとしており、胴のくびれた男好きのするタイプでかなり美貌であった。なぜ、南嶽がこの里子のことを慈海に頼んだか。考えてみると理由がないとはいえない。

健康であったころの岸本南嶽は、遠くは中国にも、欧州にも旅をしたけれど、念の入った大作となると、いつも孤峯庵の書院を借りて仕事をする習慣だった。衣笠山周辺から落葉樹林のある寺のあたりが好きだったらしく、ここが、晩年のアトリエになっていた。十年ほど前のことだが、南嶽はひと夏じゅう仕事もしないで孤峯庵の書院で暮したことがある。そのとき、つれてきていたのが里子であった。

「これはな、わしの描いた雁がんや」

里子をつれて、孤峯庵の庫裡ぐりの杉戸から本堂に至る廊下、それから、下間げかん、内陣ないじん、上間じょうかんと、四枚襖よすのどれにも描かれてある雁の絵をみせて歩いた。

襖は金粉がちりばめてあった。根元の大きな古松が、池に匍はうように大きく枝をはっていた。

針のような葉が一本一本克明に描かれていた。雁のむねは、その枝にとまったり、羽ばたいたりして宿っていた。とび立ちかけて白い腹を夕空に輝かせている一羽もいるかと思えば、松の幹の瘤こぶの一部のように動かずにすくんでいる一羽もいた。子の雁もいた。口をあけて餌を母親からもらっている雁もいた。それらの幾羽とも知れない雁は、墨一色で描かれていたが、一羽として同じ雁ではなかった。画家が情熱をこめて、一羽一羽に念を入れて描いていった筆の音がきこえるよ

うであつた。雁は生きてゐるかにみえた。

これは南嶽がその年のまだ二年ほど前の春、精根かたむけて描いたものであつた。本人が自慢しても、はばからないほど卓れた絵である。

「わしが死んだらの、ここは雁の寺や、洛西に一つ名所がふえる」

酒気をおびていたので南嶽は、里子の首すじに手をやりながら微笑していった。

「啼き声がきこえるようやわね」

と、里子は本堂のうす暗い光りの中で恍惚とつぶやいた。南嶽は微笑しながら、そんな里子の首すじをいつまでも弄んでいた。

死んだ南嶽が、慈海和尚に里子を託したのは、この夏のことが忘れられなかったからであらうか。

事実、慈海も書院でよく三人で酒を呑んだものである。慈海は南嶽より十歳も若かったが、南嶽に負けないほど精悍な軀と顔をしていた。里子とも性が合った。

「和尚さん、耳の穴の毛エだけはぬいとくれやすな」

里子が酔いのまわった眼をほそめてさういうと、慈海は笑って二人をみつめている。その眼には好色な光りが宿っていた。慈海には妻はなかった。よく里子は南嶽に、

「和尚さんの眼エがこわい」

といった。慈海が自分を好いてを知っていたのだ。

慈海も南嶽も、好みが一致していた。女も酒もすべて話が合った。南嶽はいつまでも慈海が妻

帶しないことに不満らしかった。孤峯庵は燈全寺派の別格地だといっても、本山塔頭の寺院でさえ、すでに匿女は大びらであつた。庫裡の奥に、どの寺も女をかくしていた。好色でもある和尚が独身を守る理由がないと面とむかつて南嶽はいったものだ。しかし、慈海はへらへら笑つて相手にしない。しつこく南嶽がいうと和尚はこういった。

「髪を断ずるは愛根を断ずるなり、禪家の剃髮の趣意じゃがの」

初七日がきたとき、桐原里子は喪服を着て、細い白い腕に褐色の瑪瑙の数珠をはめて孤峯庵の門をくぐつた。この日は曇り空で、風があつた。小松の茂つた衣笠山は、盆を伏せたように煙つていた。なだらかな裾一円は、すっかり葉の疎らになつた落葉樹林にかわつていたが、山の赤い地肌のすくためえるあたりに、紅葉した楓がいくつもはさまれて映えている。

孤峯庵には、山門のわきに鉄鎖のついた耳門があつた。里子が草履の音をさせて入つてくると、この鉄鎖はキリキリと音をたててあたりの静寂を破つた。応対に出たのは、里子には初対面の慈念である。鉢頭の大きな、眼のひっこんだ小坊主は、少し長目の青無地の袷をきて板の間に膝をついていた。それが庫裡の煤けた柱を背にしていやに大人っぽくみえる。里子はちよつと途惑つた。

「出町がきたと和尚さんにいうとくれやす」

里子は、上りはなの踏石に立つて、そういった。

「はい」

慈念はすぐ隠寮いんりょうの方に下ったが、まもなく、奥から廊下を歩く早足の音がして、白衣の袷あわせに角帯をしめた慈海が出てきた。

「あがんなはれ、あがんなはれ」

里子は、なつかしそうに和尚をみた。むっちりとした里子の軀はいつものとおりしやしきしやしきしていたが、顔だけは思いなしか心もち蒼あおくく澄うんでみえた。そんな里子をみて、慈海和尚は喜悅きえつの声をあげた。和尚は里子を書院に通した。そこは、里子にも思い出の部屋であった。南嶽の葬式は、すでにここですんでいた。築山つきやまと池の見える静かな部屋である。里子は掌てを畳について臉おもてをうるませていった。

「和尚さん、お久しぶりどす」

里子は、南嶽の葬式に列席するわけにはゆかなかった。出町の花屋の二階でその死を知り、葬式の日取りも知ったが、一人で故人を偲しのんでいたという意味のことを語った。

「早はよおまいりしたい。和尚さん、あの人の絵をみせとくれやす」

里子はあまえるようにいい足した。

本堂に案内され、やがて里子は打敷うちしきのかかった戒台の上に、まだ新仏の位牌いははが特別に飾られてあるのをみて息をつめていた。

秀嶽院南燈一見居士。

慈海がつくった院号の戒名であつた。岸本南嶽はいま、一尺たらずの短冊たんざく型の板にその軀をちぢこめて立っていた。